

聖マリア国際協力ニュース

第 104 号

平成 21 年 4 月 1 日発行

韓国人研修生に同行して

臨床検査部 高橋明子



長崎平和公園にある平和祈念像の前で

2月28日、韓国カトリック医療協会研修(技師グループ)の長崎研修旅行に、韓国語教室の池田先生、チャプレン室の井手るみ子さん、国際事業部の矢山さんと同行しました。

最初の訪問先は原爆資料館でした。研修生の方々は、館内の原爆被害の悲惨な写真や展示物を見てたいへん驚かれた様子でした。また自らも重い傷を負いながら、負傷者の救護や原爆被害の研究に献身的に取り組まれた永井隆博士に関する展示に、ひときわ関心深く注

目されている姿が印象に残りました。また日本各地から贈られた千羽鶴に興味を持たれていたもので、みな一つ一つ平和への祈りを込めながら折られたものだと説明すると、非常に感銘を受けたと仰っていました。

次に訪れた平和記念公園では、平和祈念像の天を指す右手と水平に伸ばした左手が意味するところ(「原爆の脅威」と「平和」)を予めご存知の研修生がおられ、驚きました。私は最初のうちは多少緊張していましたが、片言ながら研修生と会話を交わしていくうちに、次第に緊張もほぐれ、この頃にはお互いに笑顔が絶えないようになりました。

大浦天主堂やコルベ神父記念室でも池田先生の説明に熱心に耳を傾けておられ、その真剣さに敬謙なカトリック信者の姿を垣間見た気がしました。

今回このような機会をあたえていただき、ありがとうございました。もっと多くのことを韓国人の方々と話せるように、韓国語の勉強を頑張りたいと思います。



韓国人研修生よりたくさんの感謝の言葉

国際事業部 矢山進一

去る2月27日より3月6日まで、本年の韓国カトリック医療協会 技師グループ研修が実施され、6名の研修生が職種毎に臨床検査室、臨床放射線室、薬剤科、栄養指導管理室の各部署に分かれて研修を受け入れました。以下に研修生の本研修および当院に関する感想・印象を掲載しておりますが、今回の研修生の満足度は例年にも増して高かったようです。ご協力いただいた関係各所の方々に感謝申し上げます。

1. 研修全般についての感想・意見
「研修期間中たいへん親切にしてくださいました。おかげ様で韓国にたくさんの良い思い出を持って帰ることができます。」
「聖マリア病院の職員の方々にたいへん親しみを感じました。帰国しても日本での思い出は永久に忘れないでしょう。」
「(長崎研修で) 聖地を巡礼する機会を与えられたことに感謝しています。」

2. 聖マリア病院職員についての印象
「見知らぬ人にも明るく挨拶してくれる。」
「親切で、自分のことよりも他人に配慮する。」
「患者のプライバシーに配慮し、患者の声によく耳を傾ける姿勢は学ばなければならないと思いました。」
「自分の仕事に忠実な姿が印象的でした。」

3. 聖マリア病院の中についての印象
「どこに行ってもきれいで、患者さんはさぞかし快適だろうという印象を持ちました。」
「すべてのシステムが患者中心に構築されている。」

「職員が皆きつい仕事を厭わず、病院全体がうまく運営されている。」
「患者のための最高の施設を作ろうとする理事長の努力があちこちで見受けられました。」

4. その他、特に印象に残っていること
「交流会の時、たくさんの人たちと対話を重ねるうちに日本に対する偏見が解消された気がしました。」
「日本語が下手な私に、対応した職員の方々は一生懸命韓国語を使って説明しようとしてくれ、本当に感謝しました。」
「研修現場のあちこちにグッド・アイデアが隠れていました。帰国したらぜひ真似したいと思います。」

※以上は研修生アンケートの回答より抜粋しました。



研修生と各現場の研修担当者が一堂に会した送別会

かつてのプロジェクトの地、ストモ病院を訪問

国際事業部 山崎裕章



IRD (救急棟) の外観

IRD1 階の様子

当院は1995年より2000年まで、当時の国際協力事業団(現 国際協力機構)の委託により「インドネシア国ストモ病院救急医療プロジェクト」を実施し、延80名もの聖マリア病院職員が専門家としてジャワ島東部に位置するスラバヤ市のストモ病院に派遣され、日本政府の無償資金協力で建設されたIRD(救急棟)で主として活動しました。
私は本年1月から3月にかけて、結核対策プロジェクトのためインドネシアに滞在しましたが、その際、ストモ病院IRDを訪問する機会があり、救急医療プロジェクトに関わっていた多くのストモ病院スタッフが出迎えてくれました。

スタッフは、かつてここで共に活動した聖マリア病院職員の名前を何名もあげ、盛んに当時を懐かしんでいました。また「聖マリア病院からの技術移転のおかげで、この地域における救急医療の質は大幅に向上した。」と

口々に感謝の言葉を述べていました。

IRDの中には大勢の患者で混み合っていました。各部門のスタッフが各概ねスムーズに対応しているように見受けられました。もちろん実際にはいろいろな問題も存在するのでしょうし、今回のような短時間での訪問でそれらは見えてきません。しかし、プロジェクトが終了して9年後の現在、現地救急スタッフの手により救急棟が運営され、多くの市民の救命に貢献していることは確かであり、これは当院が行った国際協力の成果であると言えます。今回はそれを再確認できた貴重な機会でした。



かつてプロジェクトに関わっていたストモ病院スタッフたち

マレーシアからの研修員を受け入れて

臨床工学室 堤善充

去る3月2日～3日の2日間、JICA産業技術分析(電子医療機器)に係る研修を実施し、5名のマレーシア人研修員を臨床工学室で受け入れました。研修の目的は、臨床工学室における医療器材の予防メンテナンスに係る手法と器材管理法について学ぶことでした。

今回の研修員は、医療施設において医療機器の保守点検を担当する方々(BME: Bio Medical Engineer)、およびBME養成学校の講師の方々でした。マレーシアではBMEとしての国家資格はなく、養成学校を卒業すれば皆BMEとして業務を行うことができるということでした。日本における臨床工学技士と類似する部分もありますが、生命維持管理装置の操作など、いわゆる臨床業務を行うことはできない職種だということです。

研修では、まず日本における医療機器管理体制を踏まえ、当院での管理方法を総論的に説明しました。MEセンターでは汎用性のあるME機器を中央管理し、日常的に機器の不具合を点検する体制を整えているため、結果として医療機器のMTBF(平均故障間隔)が長くなっていること、機器の安全性を確保できること、また使用者だけでなく患者様にも安心感を提供できることを伝えました。医療機器の修理に関しては、日本ではPL法等の法的規制の関係で、メーカーが施行する修理と技士が施行する修理とは

明確に区分されていることを説明しました。
また患者様に使用している生命維持管理装置を中心に現場見学を行ったところ、特にICUでの人工呼吸器管理方法について興味を示されたので、日常点検・定期点検・終業点検方法等の業務について細かく説明しました。

研修終了に際してのディスカッションでは、BMEと違って、臨床業務を行うことができる日本の臨床工学技士が羨ましいという意見が出ました。また医療機器の操作方法や各種情報をどのようにして現場の医療スタッフへ周知させているかについて質問されましたので、各種勉強会の開催手順などを説明しました。

日本と比較すると、BMEの制度を含めたマレーシアの医療機器管理体制は発展途上にあるとの印象を受けましたが、研修員たちの熱い前向きな姿勢は、何となく自由のない医療現場で勤務している自分に対する戒めであるかのようでした。研修員たちの飛躍を願うとともに、今後も国際協力に貢献できるよう自己研鑽に励みたいと思います。

今月の動き



【派遣】
・4月12日(日)～5月2日(土)
高岡宣子(東京連絡事務所); JICAパレスチナ・母子保健リブダクティブフルス向上プロジェクトフェーズ2のため、短期専門家としてパレスチナへ派遣。
・4月19日(日)～5月1日(金)
山崎裕章(国際事業部); ISAPH草の根技術協力事業における寄生虫検査に係る協力のため、ラオス国へ派遣。